

クリスマスメッセージ

イエスこそ私たちの希望

ランデス ハル (会員)

教会暦によれば今年 11 月 30 日に待降節に入ります。クリスマス礼拝の聖日に先立つ 4 週間をその準備期間と定めているのです。東京 Y W C A 会館では青葉のまつりを催して、建物の内外にクリスマスの飾りつけをしました。家の門口にリースを飾るのもこの頃です。

私の家族にとって待降節に欠かせないのがメサイヤの演奏を聴くことです。G・F・ヘンデルがオラトリオ・メサイヤを作曲したのは 18 世紀の初めことですが、物語は主として英国国教会の祈祷書からの引用で、人びとが親しんでいた聖書の言葉によっています。音響は男女 4 声による独唱、二重唱、合唱と語りがオーケストラ伴奏により歌われる部分と合奏曲とが美しく組み合わされています。誕生から復活に至るイエスの全生涯が救い主の働きを示すゆえに、オラトリオは全 3 部によって繰り上げられているのです。

さて人びとは 2 千年以上もの昔にあった一人の男の子の誕生を、なぜ幾世紀にもわたって大切に祝っているのでしょうか。メサイヤ第 1 部「救い主出現の預言と降誕」を手がかりに考えてみましょう。

オラトリオの全曲は穏やかな前奏曲で始まり、救い主の到来の近いことを伝えます。第 1 部のテキストはイザヤ書とルカおよびマタイによる福音書から多く引用されています。救い主の出現は古くから予言されてはいましたが、どのような形でいつ実現するかは知らされてはいませんでした。

ヘンデルはアルトの独唱でおいでになる方の驚くべき姿を描きます。「見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み、その名はインマヌエルと呼ばれるであろう。この名は「神は我々と共におられる」という意味である。」と。神の分身がこの世に来られ、私たちの傍らにあって救いを実現して下さる、と言うのです。

続いてバスの独唱が「暗闇の中を歩んでいた民は、大いなる光を見、死の陰の地に住む者の上に「光が輝いた。」と、歌います。イエスの誕生の頃人びとが圧制の下に置かれていたという時代の背景を語っているのに留まりません。主の誕生を受け入れるところではいつも、絶望して

いる人びとに光が勇気を与えているのです。曲は合唱となり「ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた・・・」と高らかに歌います。

次いでテキストは私たちになじみ深いクリスマス物語へと展開します。ソプラノの独唱が羊飼いたちへ主の誕生のお告げを歌います。続いて天使の大軍による讚美の声が合唱となって夜空に響きわたります。「いと高きところでは、神に栄光があるように、地の上では、御心に適う人びとに平和があるように」と。

さてこれまで見てきたイエスの誕生の有り様は私たちの知恵では理解できないたくさん秘儀に包まれています。それにもかかわらずこの物語を幾世代もの人びとが受け入れ、信仰者として生きてきました。現代の私たちに語られるメッセージは何でしょうか。

救い主イエスの誕生が今も希望の根拠であることには変わりありません。それは見映えのしない、弱々しい形で与えられているにしても、あの夜、馬小屋が男の子の産室であったように。神の約束の成果も人の目には誇らしく、力強く見えるとは限りません。それでもなおそこに私たちの希望の根拠をおきましょう。

私たちの願いとは相容れない方向へとこの国は歩んでいるように思えます。この時にも生命を尊ぶ平和な社会の実現に向け、新たな力をふるい立たせる源はクリスマスに与えられる希望に他なりません。イエスを神の子と信ずること、またこの世界は神の支配のうちに、私たちもその中にあるとの信仰のゆえです。